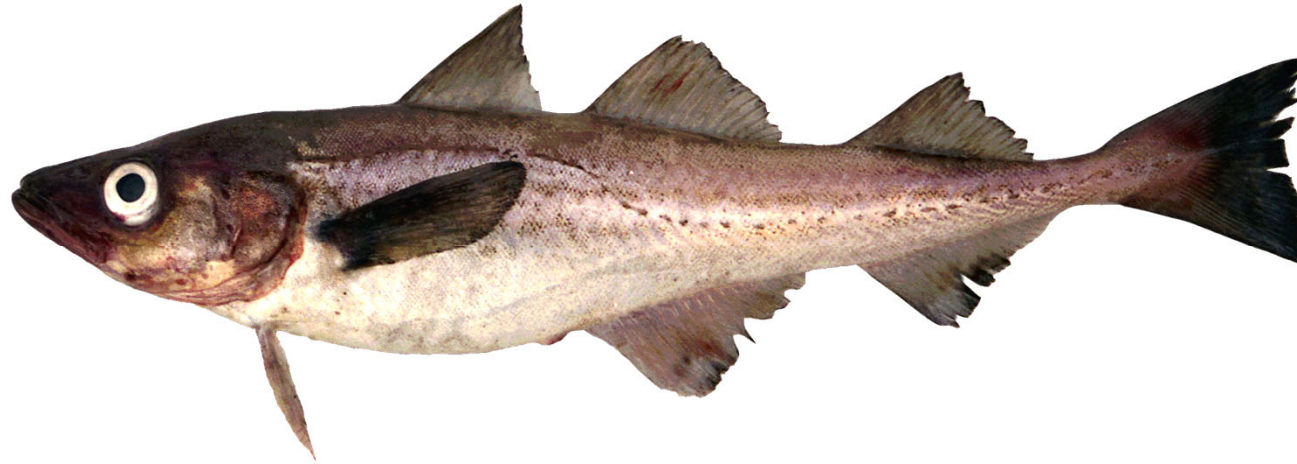
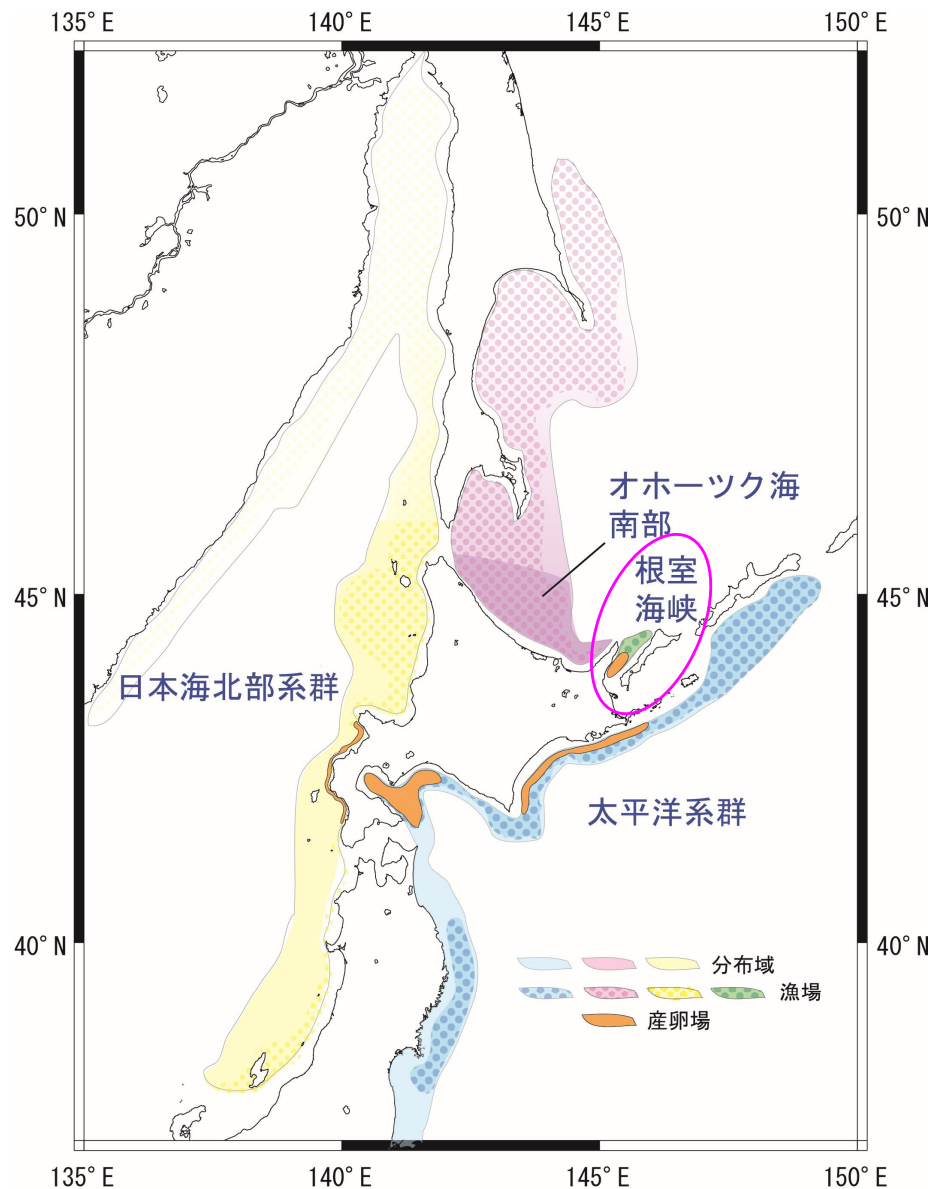




スケトウダラ根室海峡 令和7年度資源評価結果

生物学的特性等



- 寿命：不明（10歳以上）
- 成熟開始年齢：
3歳（一部）、5歳（大部分）
- 産卵期：1～4月
- 産卵場：根室海峡以外の水域の
産卵場については詳細不明
- 産卵のために根室海峡に冬季に
来遊する群れが漁獲の主体
- 産卵期以外は主にオホーツク海
南西部に分布すると推測される
跨がり資源
- 若齢期や分布・回遊に関する情
報は少ない

資源評価の方法（昨年度）

2024年漁期（4月～翌年3月）までの漁獲データ
すけとうだら刺網（専業船）の努力量と漁獲量



すけとうだら刺網の1隻1日あたりの漁獲量（CPUE：
資源量指標値） ※ 2002年漁期以降のブロック操業除く



資源管理基本方針で定められた「**維持または回復させるべき目標となる資源量指標値（0.71トン/隻日）**」を基準に現状評価*

* 本資源は跨がり資源であり、新漁業法に則したMSYに基づく管理基準値の設定は困難であるため

資源評価の方法（今年度）

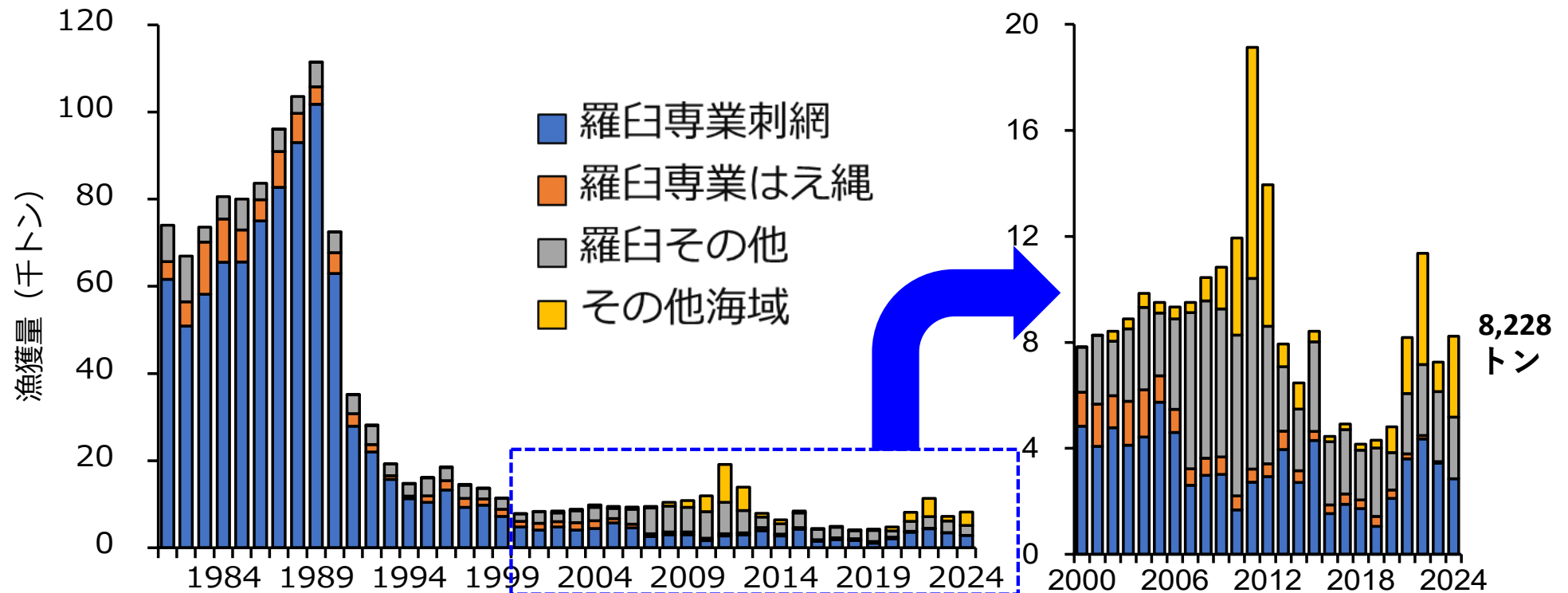
2024年漁期（4月～翌年3月）までの漁獲データ
すけとうだら刺網（専業船）の努力量と漁獲量

すけとうだら刺網の1隻1日あたりの漁獲量（CPUE：
資源量指標値） ※ 2002年漁期以降のブロック操業除く

資源管理基本方針で定められる「維持または回復させるべき目標」の検討のため提案した、資源量指標値の
平均値（2.98トン/隻日）および過去最低値（0.71トン/隻
日）を基準に現状評価*

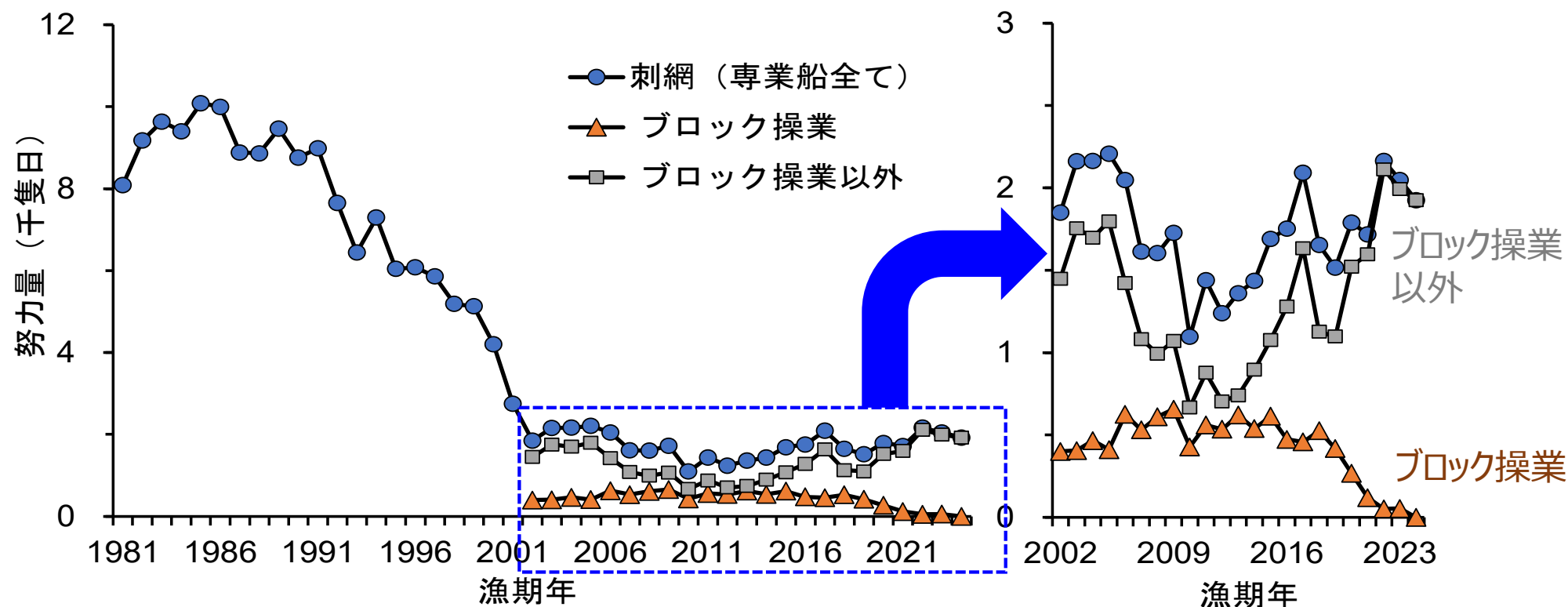
* 本資源は跨がり資源であり、新漁業法に則したMSYに基づく管理基準値の設定は困難であるため

漁獲量の推移



- 漁獲量は1990年代初頭に急減し、その後は低水準で推移
- 2011年漁期にかけて緩やかに増加したが、2012年漁期以降は再び減少
- 2021年漁期以降再び増加し、2024年漁期は8,228トン
- 1990年代まで漁獲の大部分は「羅臼専業刺網」と「羅臼専業はえ縄」
- 2000年代以降「羅臼その他」や、年によって「その他海域」が増加

努力量の推移（羅臼地区の刺網専門船）

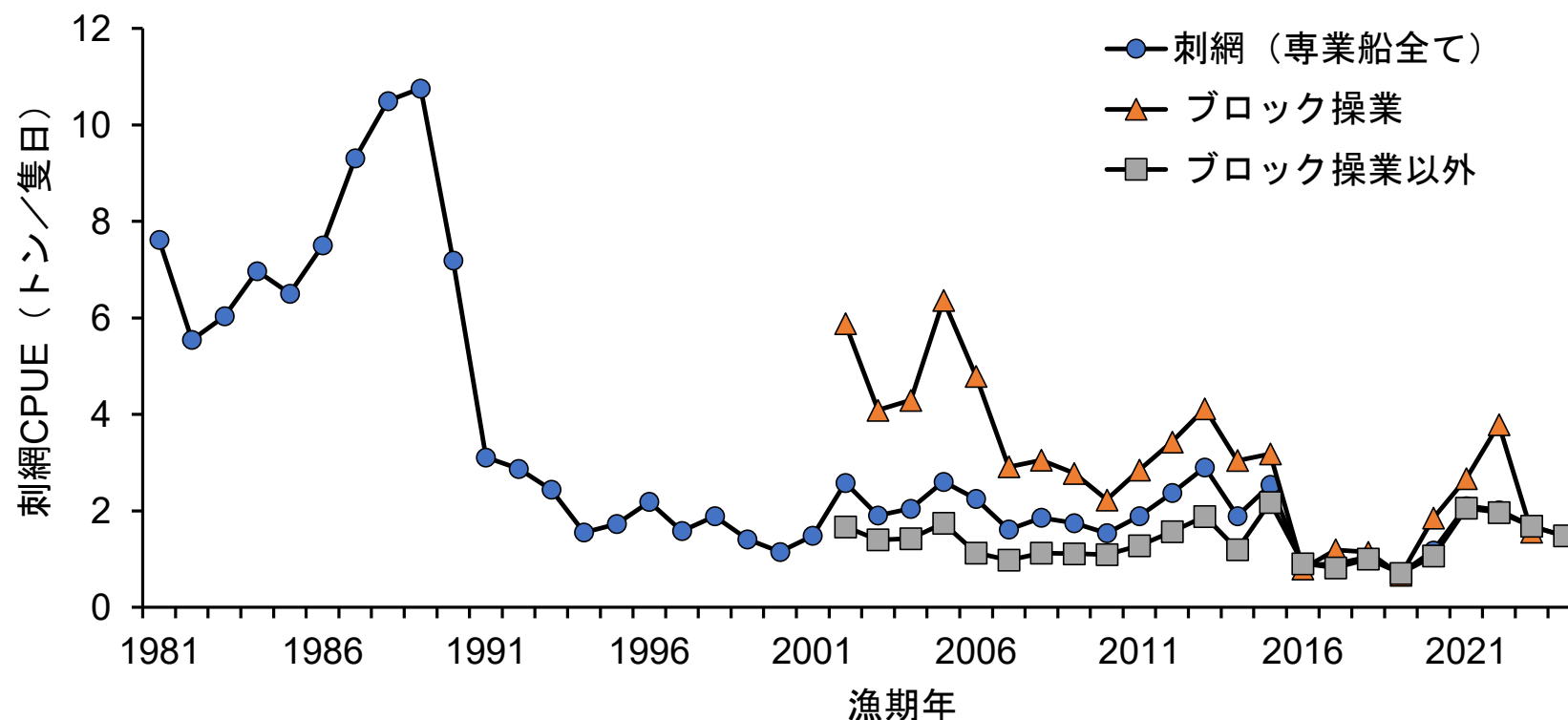


- 努力量は2002年漁期まで大きく減少し、その後は低水準で推移
- 2002年漁期からブロック操業*が本格的に開始
- ブロック操業は2002～2018年漁期は横ばい、2019年漁期以降急減、2024年漁期はゼロ
- ブロック操業以外は2015年漁期から増加傾向

* ブロック操業

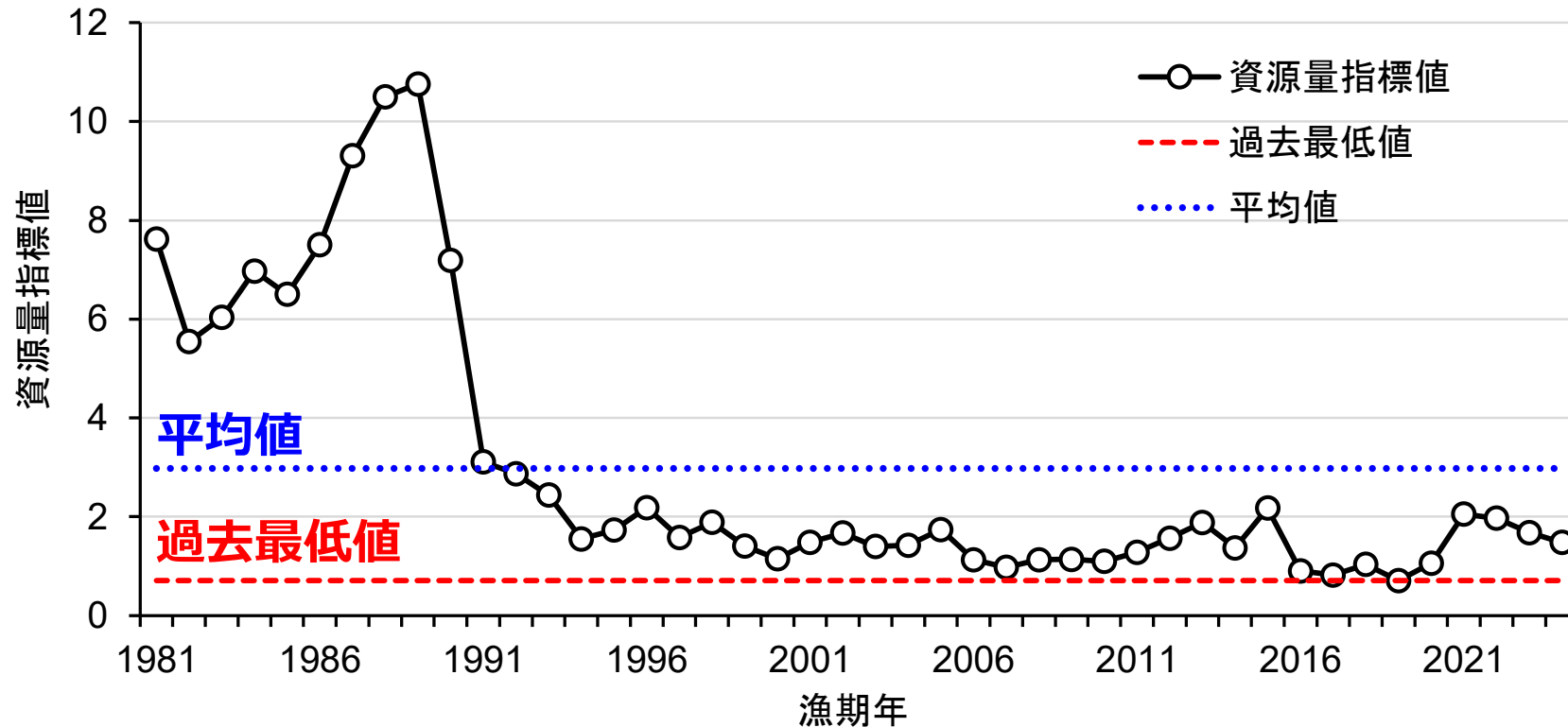
漁獲圧軽減と操業コストの削減を目的として、複数の経営体がグループを作り減船して操業し、水揚げをプールする操業形態

資源量指標値の推移



- 1989年漁期をピークに急激に低下、2016年漁期以降さらに低水準で推移
- 2002年漁期にブロック操業が本格開始、CPUEは始め高かったがその後低下
- 評価に用いる資源量指標値： 2001年漁期までは專業船全てのCPUE、
2002年漁期以降はブロック操業以外のCPUE

管理基準値の更新について



- 資源量指標値が来遊量を反映した指標であると考え、1981～2024年漁期の平均値（2.98 トン/隻日）および過去最低値（0.71 トン/隻日）を「維持または回復させるべき目標」の検討のため提案
- 2024年漁期の資源量指標値は1.48トン/隻日であり、1981～2024年漁期の平均値を下回るが過去最低値を上回る
- 資源量指標値に基づき、直近5年間の資源の動向は「横ばい」と評価

評価と提案のまとめ

- 本資源は主分布域が日本漁船の操業水域になく、日本漁船からの情報のみでは「跨り資源」である本資源全体の動向を捉えることができないことから、「漁獲管理規則およびABC算定のための基本指針」に従い計算される管理基準値案に基づく漁獲管理規則の提案は困難である。
- 資源管理方針に関する検討のため、資源量指標値（羅臼地区のすけとうだら専業の固定式刺網漁業による延べ出漁隻数当たり漁獲量）の1981～2024年漁期の平均値（2.98トン/隻日）および最低値（0.71トン/隻日）を「維持または回復させるべき目標」として提案する。
- 2024年漁期は 1.48トン/隻日であり、1981～2024年漁期の平均値を下回るが過去最低値を上回った。
- 直近5年間の資源の動向は「横ばい」と評価した。



スケトウダラ（根室海峡）①

スケトウダラは北太平洋に広く生息し、本評価群はこのうち根室海峡で漁獲される群である。本資源の漁獲量等は漁期年（4月～翌年3月）の数値を示す。



図1 分布域

本資源は北方四島水域やロシア水域などに跨って分布する。日本漁船の操業水域には主に産卵期に来遊すると考えられる「跨り資源」である。

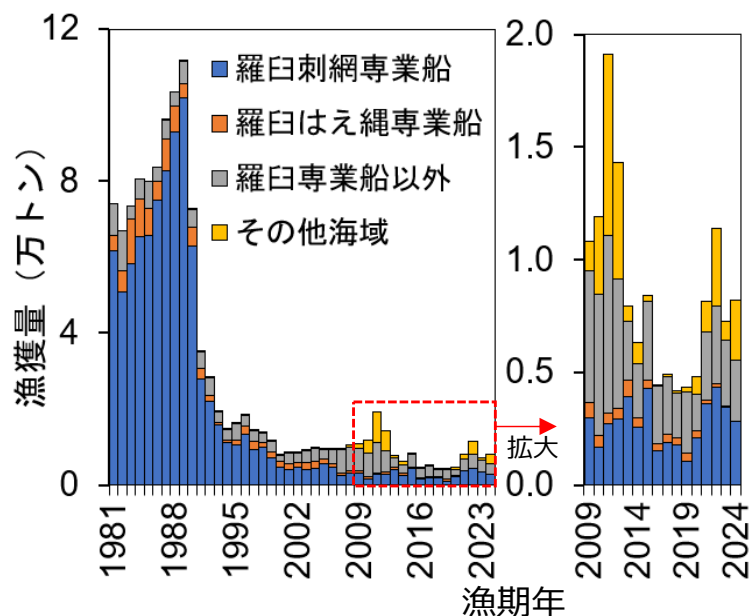


図2 漁獲量の推移

漁獲量は1990年漁期から急激に減少した。2016～2020年漁期は0.4万トン台に低迷したが、2022年漁期には1.1万トンまで増加した。2023年漁期は0.7万トン、2024年漁期は0.8万トンであった。

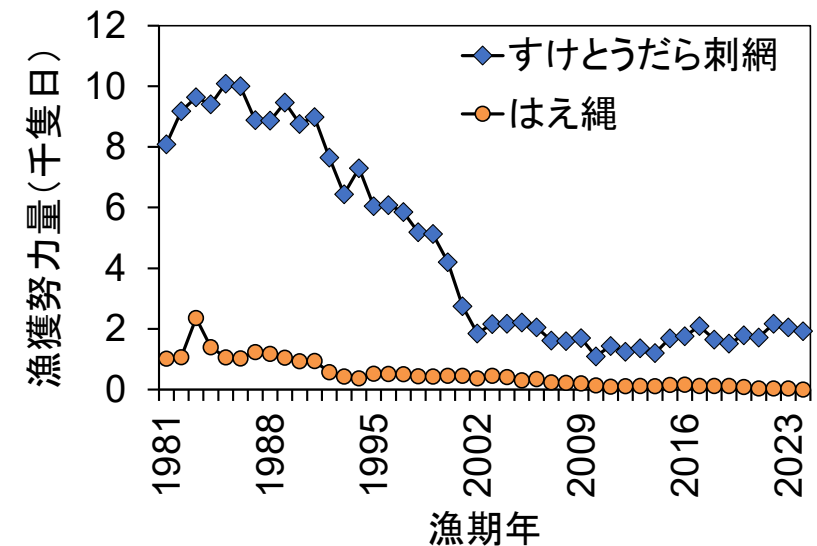


図3 漁獲努力量の推移

漁獲努力量は、すけとうだら専門の固定式刺網漁業では2002年漁期まで大きく減少してその後はほぼ横ばいで推移した。はえ縄漁業では1983年漁期を最高にその後減少し、2024年漁期は操業されなかった。隣接水域におけるロシア漁船の漁獲量・漁獲努力量は不明である。

スケトウダラ（根室海峡）②

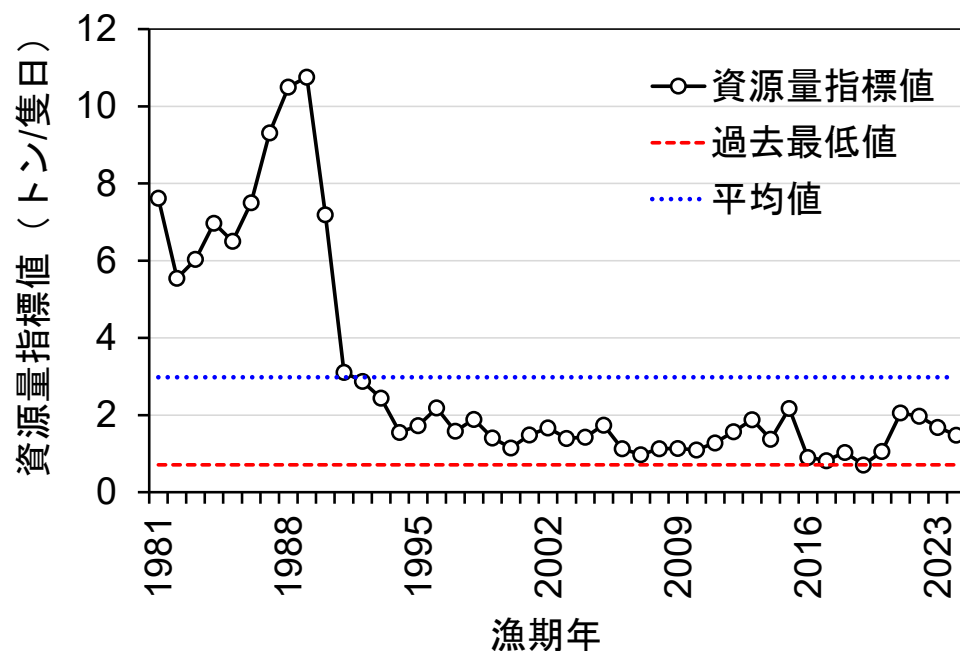


図4 資源量指標値とその平均値および過去最低値

羅臼地区のすけとうだら専業の固定式刺網漁業による延べ出漁隻数当たり漁獲量を資源量指標値とした。2002年漁期以降はブロック操業*のデータを除いた。

資源管理方針に関する検討のため、資源量指標値の1981～2024年漁期の平均値（2.98トン/隻日）および最低値（0.71トン/隻日）を評価の基準として提案する。

2024年漁期の資源量指標値（1.48トン/隻日）は平均値は下回るものの最低値を上回る。

本資源の管理基準値等の検討について

本資源は主分布域が日本漁船の操業水域になく、日本漁船からの情報のみでは「跨り資源」である本資源全体の動向を捉えることができないことから、「漁獲管理規則およびABC算定のための基本指針」に従い計算される管理基準値案に基づく漁獲管理規則の提案は困難である。

現行の漁獲シナリオでは、我が国の漁船による漁獲の状況等を踏まえて、我が国漁船の操業水域に分布する資源の最適利用が図られるよう漁獲を管理するとされている。

*ブロック操業とは漁獲圧軽減による資源保護と操業コスト削減を目的として、複数の経営体がグループを作り、グループ内の1隻が交互に休業する操業形式。